



肝ぞう通信

第2号 《肝がんについて》

お知らせ

肝疾患医療センターは、肝疾患に関する心配事や悩み事のご相談にお応えしています。

当院では、総合相談室が窓口になっております。

場所：病院1階
総合相談室

受付時間：
平日 9:00~15:00
土曜日 9:00~12:00
(第2・4土曜日除く)

キーワード

肝切除
RFA
TACE
分子標的薬
生活の質 (QOL)

次回号

テーマ：検体検査
10月20日発行予定

発行責任者

東海大学医学部付属病院
肝疾患医療センター長
加川 建弘

肝がんについて

当院の肝疾患医療センターが発行する肝ぞう通信の第2回目は肝がんの診断と治療についてご紹介します。

肝がんの診断と治療について

肝がんは大半が肝細胞がんと呼ばれる種類であり、その原因は、B型肝炎とC型肝炎が中心でしたが、近年は非アルコール性脂肪肝炎 (NASH) やアルコール性肝炎などの生活習慣からくる発症も増えています。診断は、採血でわかる α フェトプロテイン (AFP) やPIVKA-IIという腫瘍マーカーと、画像検査 (超音波検査、CT、MRI など) とを組み合わせで行います。肝がんの治療 (図：治療アルゴリズム) は、肝機能、転移の有無や広がり、腫瘍の数と大きさなどにより、患者さんと相談して方法が決められます。

根治可能な早期の肝がんには、手術かラジオ波焼灼療法 (RFA) が推奨されています。大きさや数が増してくると肝動脈化学塞栓術 (TACE) が選択されます。がんの数が多く、転移を伴う場合や TACE の効果が少ない肝がんには、2009年から分子標的薬という外来治療が進歩してきました。2020年9月現在肝細胞がん患者さんに使用できる分子標的薬は4種類で、経口薬が3種類—ソラフェニブ (ネクサバル®)、レゴ